



# 小学校だより

2025年  
1学期号

2025.7.11

Vol.  
159

## ロールモデル

校長 相川 保敏

五月二日に六年生と一年生がレゴランドへ遠足に出かけました。一年生と六年生が小グループになってランド内を巡ったり、乗り物に乗ったりして楽しみました。しかし、この日はあいにくの雨模様で、風も時折強く吹き、合羽を着ていても制服が濡れてしまったような日でした。集合時間に、合羽も着ず制服がびしょびしょになっている六年生がやってきました。この六年生は、一年生が合羽を着ていても濡れてしまうので、大き目の自分の合羽を脱いで一年生に着せてあげたと当然のように言いました。よく見ると、小脇に一年生の合羽を抱えていました。私は、なんて優しいんだろう、そしてなんてかっこいいんだろうと思いました。一年生には、六年生の姿はどのように映っているのでしょうか。

近年、女性の社会的活躍が進む中で、女子教育においても「ロールモデルの存在」が重要視されています。一般的に、自分に似た人が成功しているのを目にするこゝで、「自分にもできるかもしれない」と感じるようになります。自分ならできる「信念や確信を自己効力感(セルフ・エフィカシー)」と言います。自己効力感とは、カナダ出身の心理学者アルバート・バンデューラが提唱した概念です。個人が自身の能力を信じて目標を達成できるという信念は、行動の動機づけに強く影響を与え、学業やキャリアへの意欲を引き出すと言われています。この自己効力感を高めるには、自分自身

が何かを達成したり、成功したりした経験が最も重要ですが、自分以外の他人が何かを達成したり成功したりすることを観察することも大変有効です。自分が目指す方向で成功を収めている人物を観察し、その行動や姿勢を学ぶことで、自分も同様の成功を収める可能性があると感じられるようになるからです。そのためには、望ましい姿を体現しているロールモデルを見つけることが重要となります。特に思春期を迎える前の小学生期に、「自分と重ねられる誰か」がいることは、将来の進路選択や自己肯定感の土台づくりに大きな意味を持ちます。

小学生では高学年の姿がロールモデルとして十分に成り立ちます。むしろ、同じ学校にいる「少し年上の身近な存在」は、小学生にとって非常に効果的なロールモデルとなり得ます。高学年の先輩は同じ環境で学校生活を送る、少し未来の自分の姿を重ねやすく、下級生にとっては「自分もなれるかもしれない」と思える現実的なモデルになります。高学年のかっこいい姿や優しい姿に、下級生が憧れを持ち、行動をまねするようになったり、上級生も見られるような自覚が芽生え、より責任感を持って行動するようになったりします。そして、相互の信頼感や思いやりの心が育つと考えられます。実際に六年生も「最初はお世話に行くときに緊張していたけど、今ではお世話に行くのが楽しみにになりました。私が一年生の時に六年生のお姉さんがすごく優しく接してくれたので、私もそのお姉さんのようになれたらいいです。」と云うように、一年生の時の六年生の

お姉さんをロールモデルとしているのです。

幸いにも、本校では同性のロールモデルにふさわしい六年生がたくさんいます。たとえば本人が気づいていなくてもその一言、その姿勢、その優しさ、かっこよさが、誰かの憧れになっていることがあります。優しさだけでなく、例えば、運動会での、颯爽とトラックを走り抜ける六年生の姿を見て、「かっこいいな」「あんなふうになりたいな」と思った下級生もたくさんいたと思います。一方、六年生には誰かのロールモデルになっているかもしれないという自覚を持たせ、大きな自信と責任感を高めていきたいと思えます。そして、すべての子どもたちが、自分らしく輝きながら、誰かの憧れとなるよう、そして同時に誰かに憧れながら成長していけるよう学年を超えた学び合いや、個々のよさを認め合う文化を継承してまいります。

今後とも、皆さまのご理解とご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。



▲一年生をお世話する六年生

### 特集

## 春の遠足

委員会報告

P.4

学期の行事

P.5

学年トピックス

P.6  
P.17

PTA

P.18  
P.19

一学期の思い出

P.20